

機関番号 : 34511
 研究種目 : 基盤研究 (C)
 研究期間 : 2008~2010
 課題番号 : 20520311
 研究課題名 (和文) 現代ヨーロッパ文学における数学と形而上学の学際的研究
 研究課題名 (英文) An Interdisciplinary Study of Mathematics and Metaphysics in the Modern European Literature.
 研究代表者
 森 尚也 (MORI NAOYA)
 神戸女子大学・文学部・教授
 研究者番号 : 80166363

研究成果の概要 (和文) :

本研究は、二十世紀の作家サミュエル・ベケットの不可思議な記述や主題群を、ライプニッツ形而上学のもとで、とらえ直すための全体構想をはじめて示したものである。その構想のもとで、ベケット/ライプニッツ的テーマは、相互に関連しながら、全体として体系的なモナドの宇宙を形作るのである。この構想の正しさを証明するためには、ベケットがライプニッツを深く理解していたことが前提となるが、草稿研究により、その事実も確認できた。

研究成果の概要 (英文) :

This research offers, for the first time, a grand design in which Samuel Beckett's bizarre descriptions of humans and stones and other incomprehensible images and motifs in his novels and plays that exhibit themselves in accordance with Leibniz's metaphysics, that is, the Monadology. Although the proof of this grand design requires the premise that Beckett had known the Monadology in the depths, the manuscript studies in Reading and in Dublin has revealed that Beckett learned in the 1930s from Windelband's *History of Philosophy* about the metaphysics of Western thought, including Leibniz's Monadology.

交付決定額

(金額単位 : 円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野 : 人文学 A (哲学・文学)

科研費の分科・細目 : ヨーロッパ文学

キーワード : サミュエル・ベケット、ライプニッツ、数学、形而上学、モナド、無窓性、力

1. 研究開始当初の背景

(1) ベケット文学における「無窓性」の発見

① 数学と形而上学の結びつきは古代ギリシアから現代にいたるまでヨーロッパ思想の深部に流れている。20世紀を代表する作家サミュエル・ベケット(1906-1989)の文学作品にも数学と形而上学は、思想的、主題的、形

式的な独自性の中心にある。とくにベケット研究においては、1963年のサミュエル・ミンツ、さらにヒュー・ケナーのベケット論において、デカルト的二元論と機械論が盛んに論じられ、今なお、その余波は続いている。筆者は、もちろんデカルトの影響を否定するものではないが、ベケットにとってデカルトは、中心ではなく、周辺の議論、批判的な対象に

すぎないと思う。なぜならベケットの主人公たちは、デカルトの明晰判明とは対極にある、曖昧模糊たる世界の住人であるからだ。

②デカルトからライブニッツへと研究の重心を移したきっかけは1988年から89年にかけての、レディング大学図書館での草稿研究である。とりわけ当時未刊のベケット最晩年のテキスト *Stirrings Still* (邦訳『なおのうごめき』) の草稿には、ライブニッツ形而上学の決定的な影響を示唆する ‘windowless self’ (窓のない自己) という言葉があった。それは最終テキストからは消されたものだったが、他者とのコミュニケーションの手段をいっさい持たないという「無窓性」の概念は、ベケット文学の根底に流れるものであった。1930年代に執筆した小説『マーフィー』から、1940年代の『ワット』、1980年代の *Stirrings Still* まで、ベケットの作家人生を貫く主題として「無窓性」は常にベケットの人間観、世界観の中心にあった。

③興味深いことに『マーフィー』には屋根裏部屋に光を通さない天窓がある。その部屋をベケットは『マーフィー』仏訳の際に、ライブニッツのハノーヴァーの住居と比較している。また『なおのうごめき』にも、開けることのできない小さな窓を描きながら、ベケットは「窓のない自己」という表現を使おうとしていたことになる。つまり、筆者の仮説は、ベケット作品に登場する窓の多くが、光を通さない閉じられた窓であり、それは登場人物の絶対的孤独、無窓性の表現、文学的装置として機能している、というものである。

④それを最初にまとめたのが、拙論「ベケットのモナド的無窓世界、あるいは闘争する時計たち」(『ユリイカ』1996年2月号180-87)であり、国際的に発信したのは“Beckett’s Windows and the Windowless Self” (*SBT/A* 14, 2004, pp. 357-370)であった。後者は海外の複数の研究者から引用されている。しかし、大きな反響というほどでもない。

(2) ベケットにおける「予定調和」の応用
①ライブニッツの形而上学、モナドロジーにおいては、自然界を構成する最小実体としてのモナドには窓がなく、他のモナドとの交通は存在しないのであるが、神を通じてあたかもモナド間の交通があるかのごとく振る舞うという。すなわちライブニッツによれば「予定調和」のもとに、すべてのモナドは予めすべての行為をプログラムされているというのである。さらに、ライブニッツは予定調和を、当時ゲーリンクスやデカルトが用いていた「二つの時計」の比喻を用いて説明した。ふたつの時計はそれぞれ別々の動きをし

ているにすぎないが、連動した動きを見せるかのようなものである。実はそれは時計職人(神)のなせる技であり、それが予定調和であると、ライブニッツは言う。

②ベケットは、ライブニッツの理論を踏まえたうえで、モナドの「無窓性」を作品に導入している。ベケットの登場人物たちの絶対的な孤独、『ゴドーを待ちながら』や『勝負の終わり』などの代表的演劇作品における、ちぐはぐで奇妙な会話のやりとりも、他者とのコミュニケーションの手段がないということに起因するのである。しかも、ライブニッツの予定調和が機能していない。ベケットにおいては「二つの時計」は狂った動きをする。だからこそ、『マーフィー』、『勝負の終わり』、『しあわせな日々』、『見ちがい言いちがい』、『なおのうごめき』におかしな時計、針の一本しかない時計、狂った鳩時計、目覚まし時計などを描いたのである。つまりベケットの時計は調和ではなく、むしろ不調和や不安の表現である。

③ベケットが無窓性や二つの時計の比喻を用いる用い方は、ライブニッツの理論を踏まえた上でのパロディ的な使い方であると思われる。だが、パロディとして片付けるには、ベケットの作品はどれも深刻である。かつてのヴォルテールの『カンディード』によるライブニッツ予定調和批判とは比べられないほど、ベケットは内在的にライブニッツを理解したうえで、無窓性のなかの孤独な人間像を描き続けている。そこにはベケットなりの真実が描かれている。この確信のもとに筆者は、ベケットとライブニッツの比較思想研究をさらに進めることにした。

④先行研究としては、1963年にジェルメーヌ・ブレがベケットの小説『ワット』をベケットによる『カンディード』として読み解く論を発表した。これがベケットとライブニッツの関係を論じた最初のものである。その後、様々な言及が多く、ベケット研究者によってなされたが、どれも断片的であった。ガリン・ダウドがようやく、ドゥルーズの影響のもとにベケットとライブニッツの比較をし、小説三部作への影響を指摘したくらいであった (Garin Dowd, “Nomadology: Reading the Beckettian Baroque,” in *Journal of Beckett Studies*, 8, 1 (1998), 15-49.)。

⑤状況が一変したのは、草稿研究に負うところが大きい。レディング大学所蔵のベケット草稿はすでに筆者が滞在した1980年代後半から1930年代の『ホロスコープ・ノート』を始めとする膨大な草稿資料を公開していた。それに加えて、ベケットの卒業したトリ

ニティ・カレッジ・ダブリンのバークリー図書館が所蔵するそれまで非公開だったベケットの「哲学ノート」「心理学ノート」を数年前から公開し始めたのである。これらのノートにおけるライブニッツの比重の大きさに研究者たちは驚いた。マシュー・フェルドマン、エリック・トニングらの草稿研究は、とくにバークリー図書館の「哲学ノート」を中心にしたものである。これまでベケットとライブニッツの比較研究を進めるなかで、どうしても仮説にとどまらざるを得なかった筆者の状況が、初期のノートを研究することにより、実証的な論証に歩を進めることが可能になった。これが筆者を今一度、レディングへと、そして新たにダブリンへと草稿研究に駆り立てた背景である。

⑥さらに付け加えるならば、ベケットがライブニッツの影響を最終的には消してしまう例は演劇作品『勝負の終わり』にもあった。ベケットのこのライブニッツの影響を隠す傾向を考慮すると、ベケット初期、中期の草稿、遡ってとりわけ形成期のノートの研究をすることにより、さらに体系的なライブニッツ形而上学の影響を論じることができないのではないかと推測された。これらの思いが、本研究の動機である。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、現代ヨーロッパ文学における数学と形而上学の関係を実際的に考察するもので、とりわけ 17-8 世紀のライブニッツ形而上学が 20 世紀のサミュエル・ベケットの文学に与えた影響について明らかにしようとするものである。

(2) ①これまで筆者が取り上げてきた多様な主題をライブニッツ形而上学のもとに体系的に再構成すること。つまり死後の生、闇の中をつぶやき、死者の記憶、順列組み合わせ、闘争、数学的な反復と運動、マイクロコスモスとマクロコスモス、中間者、有限と無限-これらのベケットの主題をライブニッツのモナドロジーと、その原理(無窓性、連続律、予定調和、生存闘争、組み合わせ術、充実空間、誕生も死もないモナド、個性性の概念等)のなかでとらえ直す。

②ダブリンのバークリー図書館所蔵の「哲学ノート」を中心とするベケット思想形成期のノートを研究することにより、これまでの仮説を実証的に論じること。

③ベケット、ライブニッツ双方のテキストを読み込む作業が①②の土台になることを忘れず、読みを深めること。

3. 研究の方法

(1) 英国レディング大学国際ベケット・ファウンデーション、愛蘭土トリニティ・カレッジ・ダブリンのバークリー図書館、米国テキサス大学オースティン校のハリー・ランサム人文研究センター所蔵のベケットの草稿研究を通じて、テキストの背後に隠れたベケットの思想、とりわけライブニッツの影響を明らかにする。

①バークリー図書館とベケット・ファウンデーションに短期滞在し、とくに思想形成期 1930 年代のノートに焦点を当て、研究する。

②テキサス大からは、ライブニッツの影響が強く表れていると思われるベケット作品のなかでも『ワット』や『事の次第』の草稿を複写・入手し研究する。

③同時に、ベケットとライブニッツのテキストの読みを深める。

④「哲学のノート」の母胎とも言える、ベケットが哲学を体系的に学ぼうとした三冊の書物バーネット『ギリシア哲学』、アレクサンダー『小哲学史』、ヴィンデルバント『一般哲学史』がある。これらベケットが使ったヴィンデルバントの英訳を含む三冊を読み込み、作品と比較する。

4. 研究成果

(1) ベケット文学の多様な主題をライブニッツ形而上学のもとに再構成すること、ベケット・ファウンデーションの「ホロスコープ・ノート」、トリニティ・カレッジ・ダブリンの「哲学ノート」などの草稿研究を通じて、ベケット文学におけるライブニッツ形而上学の影響を、作品と関連して実証的に語ることに、この二つの大きな目的の見通しに目鼻がついた。

①2009 年のレディング大学でのシンポジウム論文は、その執筆時点では、トリニティ・カレッジ所蔵のベケットの「哲学ノート」を見ていなかったため、著者はベケットの初期から後期にわたる作品を扱いながら、先のライブニッツ形而上学の主題群がいかにかベケット文学の主題群として多様に応用されているかを概略的な仮説として論ずるにとどまった。だが、これはこれまで発表してきた論文を体系的に読み直し、組み替え、相互の連関を見出す良い機会となった。その概略をまとめると次のようになる。

②ライブニッツのその階層的宇宙では、最上位の神(と最下位のモナド)を除くすべてのモナドが、より高位のモナドと、より低位の

モノドをもつ中間者である。それに呼応するように、ベケット作品におけるモノド（彼／彼女）は、下位のモノドに対しては「小さな神」、上位のモノドに対しては「一粒の砂」として存在する。すべてのモノドはそれぞれの視点から宇宙を表象（知覚）するのだが、マーフィー（『マーフィー』）からピム（『事の次第』）に至るベケットの下位のモノドたちが表象する宇宙は限りなく貧しくなっていく。このような孤独な世界のなかで、ベケットは人間、動物、石、生まれざる者（ライプニッツの言葉を使えば、「共可能性」になり損ねた「可能性」）を、他者とのコミュニケーションの手段がない「無窓性」のなかで描く。ベケットの登場人物たちにおなじみの孤独、苦痛、悲哀、また神や世界に対する悪態は、この見方によって説明可能である。彼らが数学的（形而上学的）な運動のなかにある自らの存在を止めることがないのは、それはまさに運動、力がモノドの本質であるからに他ならない。

③ライプニッツ形而上学の主題群（無窓性、連続律、予定調和、生存闘争、存在の階層〔石、動物、人間など〕や生死を超えて在り続けるモノド、小さな神としての人間）について、これまで論じてきたことが、すでに1930年代の思想形成時のベケットによって認識されていた。そのことが「哲学ノート」により確認できた。ヴィンデルバントの『一般哲学史』の英訳（*A History of Philosophy*）をベケットが丹念にノートに要約したものであるため、判読が容易ではないベケットの膨大な手書きも、ヴィンデルバントを参照しながら、ライプニッツを中心に少しずつ読み進めることができた。（まだ研究の余地は大いに残っているが。）

④「単なる一連の運動にすぎない—ベケットの石、動物、人間」という表題の拙論（英語）で、筆者はベケット作品をライプニッツ的形而上学の宇宙として読み、ライプニッツのモノド論（低位の鉱物から、より高位の植物、動物、人間という無数のモノドたちが、知覚はされないけれども無限の連続的な運動を繰り広げる宇宙）で用いられている形而上学的、数学的な観念やイメージを、ベケットがいかにか体系的かつ継続的に作品で使っているかを論じた。かつてベケットは作品のテーマを「たんなる一連の運動に過ぎない」と表現したが、それはおそらく生者のみならず、死者や、まだ生まれていない者たちや可能性にすぎないものをも排除しないライプニッツの数学的論理的パラダイムを想定しての言葉であろう。

⑤2010年12月のライプニッツ協会第二回大

会では、ライプニッツの「微小表象」という意識下の知覚をあつかう概念が、いかに文学的手法として、ベケット小説や戯曲の登場人物の「明晰判明ではない」知覚作用の表現に用いられているかを論じた。

⑥パークリー図書館の「哲学ノート」の研究を踏まえて執筆した（2011年1月-3月）英語論文「ベケットのかすかな叫び声」では、「微小表象」の主題を、さらに発展させてライプニッツの微積分や形而上学の問題と関連して展開することができた。辺と対角線の「通約不能性」（*incommensurability*）、「無理数」の問題は、ピタゴラス学派のタブーとして、ベケット初期小説の『マーフィー』や評論「二つの欲求」（*Les deux besoins*）にも出てくる。だが、ベケットは「通約不能性」の問題を、古代ギリシア哲学だけでなく、ルネサンスから近代に繋がる問題としても認識している。「通約不能性」がルネサンス期のクザーヌスによって有限者（人間）と無限者（神）の絶対的な距離として再び取り上げられ、さらにライプニッツへも受け継がれていくことを、ベケットはヴィンデルバントを要約しつつ「哲学ノート」に残していた。ライプニッツは微積分によって無限小も数学的に捉えたが、有限者と無限者の区別はクザーヌスを継承しており、人間にはどうしても近づき得ないものがあり、小説『初恋』ではそれを音の知覚の問題として表現しているのであった。クザーヌスの *docta ignorantia*（学識ある無知）は、ベケットの芸術創作の根源的理念となる。数学と形而上学の結びつきは、ベケット文学においてピタゴラスから始まり、クザーヌスを経て、ライプニッツに収斂していくのである。このような西洋形而上学の流れの中心として、すなわち古代ギリシアからルネサンス、近代を結ぶ結節点として、ヴィンデルバントはライプニッツを捉えているが、ベケットはまさに現代文学のなかで、数学と形而上学をライプニッツを中心に据えて結びつけているのである。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計1件）（査読あり、掲載決定）

- ① Naoya Mori, “Beckett’s Faint Cries: Leibniz’s *petites perceptions* in *First Love* and *Malone Dies*,” in *Samuel Beckett Today/Aujourd’hui*, vol. 24, “Early Modern Beckett,” ed. Angela Moorjani, DaniÅle de Ruyter (Amsterdam: Rodopi, 2012年刊行予定), 未刊にてページ数未定、(5,809 words).

〔学会発表〕（計2件）

- ① 森 尚也、「ベケット作品における微小表象」、2010年11月14日、学習院大学、日本ライブニッツ協会第二回大会
- ② Naoya Mori, “Just A Series of Movements: Beckett’s Stones, Animals, and Humans.” [invited, keynote speaker]
Beckett - Living Materials (International Conference on 25 & 26 September 2009), International Beckett Foundation, Reading University.

〔図書〕（計1件）（査読あり、掲載決定）

- ① Naoya Mori, “Just A Series of Movements: Beckett’s Stones, Animals, Humans and the Unborn” in *The Beckett Bestiary*, ed. Mary Bryden (Cambridge UP, 2012 刊行予定)、（未刊にてページ数不明、（4968語）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 尚也 (MORI NAOYA)
神戸女子大学・文学部・教授
研究者番号：80166363